

六之卷

泉鏡花作

卯月朔日

ミリヤアドが學院に於ける境遇の、聞くが如きものならむには、予はあまり不慮過ぎたり。渠に教を受くるものは、皆予がミリヤアドに對するとおなじものぞと、思ひしは誤謬なりき。さることゝも知らざれば、今朝も新聞讀まむとて行きたる時も、ミリヤアドはなほ臥床にありて心地あしとて起きざるよし、高澤のいひたるが、またわがまゝの起りしよとのみ、心にも留めで一室なる額の繪など見まはしなどす。ふと思ひあたりたるは、其日の卯月朔日なりしことなりけり。大方の人は知りてやあらむ、（えぷりる、ふうる）の當日なるを。よきことと思ひ出でたり。懐しきミリヤアドに、いでわれ心ばかりのもてなしをせばやと思ひぬ。

「まだ何うもお寒いぢやございませんか、上杉さん。」高津はかく聲をかけて、ミリヤアドが臥床に行く。手にせる珈琲茶碗には、温き牛乳を入れたり。戸も襖も冷かなる朝風に濃かなる湯氣の立てるが見ゆ。

「ちよいと、牛乳かい。」

「はあ、何うしたの。」

「まあ少し待つて御覽、僕がね、今好い事をするから、ちよいと、今朝米を磨いだんでせう。」

「磨ぎましたよ。」
と顔を見る。

「あつてくれりや可いが、氣なしだから棄てゝしまつたんでせう、あのね。」

「はあ。」

「磨水はありませんか、米の、何、少していゝけれど。」

「へい、何になさるの。」

「何でもさ、少うしありや可いがなあ。」

「見ませう、待つて頂戴。まあ、牛乳をあげてから。」

「と行懸る、前途を塞ぎて微笑みつゝ、

「それを飲ましツちまつちや仕やうがないや、耳をお貸し、ね、可いでせう。」

高津は目を閉りて一足すさり、

「まあ、そんなことを。」

「可いからさ。何他の日ぢやなし、今日のことだもの構ふもんか。」

「それでも何ですよ、頃は、大抵、何や、彼や、苦勞をして居なさんですから悪うございませう。眞個にさ、そこどこ

ろぢやあございませんわね。」

「そんな陰氣なことばかしいつておいでだから不可んだ。一番笑はうのに、可いぢやないかね。」

高津は少し考へたり。

「それも然うですね。新さんなら可うございませう。悪く取つたつて、腹は立てもしますまい、では。」

「あのね、よく沸かさなくツちや、身體に悪いと大變だよ。」

「は、可うござんす。」

牛乳持ちたるまゝ高津は勝手にゆきぬ。予は見送りてひとり笑壺に入りたり。

良ありて予があつらへを齎らしたれば、先づなめて鹽梅を試むるに、鹽を少し加へしなど、其不味いはむ方なきに、思はず打撃みたる予が顔を見て、高津はまた更にきづかひぬ。

「餘りですわ、まあ止しませうぢやアありませんか。」

「可いよ、可いよ、そつとおし、早くさ。」

と無理に推遣りて其臥床に入るを見るよりはやく、あとを追ひ行き外に立ちて、襖に耳をあてゝ聞きぬ。
寝返る氣勢す。

「然う、上杉さんが煮てくれて。」

といふは、ミリヤアドなり。わが胸はさすがに轟きぬ。

「あれ。」と呼びて高津の走り退く音したれば、予は慌しく遁げぬ。ミリヤアドには首尾よく米の磨水を飲みおほせき。

門口に出づるひまなくて、庭下駄を引懸げざま、背戸の戸をあくる時、寢覺の顔にやつれの見えて、髪少し亂れたるミリヤアドの、身にはゆるやかに夜の衣まとひたるが足り来て、縁側に出でたるが、はれがましき日向の庭には下り立ちあへず、莞爾と笑ひ、予が名を呼びたる、口惜しき状見えき。

「御機嫌よう。」といひすてゝ其まゝ歸りぬ。

みなし兒人

人の風説聞きたれば、予は其夜ミリヤアドが家にゆく道を、しを／＼として通りぬ。かくのごとくなりしことは未だ一度もあらざりしを。幾度も繰返して、予はあまり無遠慮なりし、と心咎したればなり。

まだ宵なれば、門は鎖さず。聖音も忍ばれつゝ勢なく進み入る、其框の戸はなかば閉されたり。さうなくは上りも得やらず、しばし行み、差覗くに、今朝われ庭口より遁歸りたれば、庭下駄を穿きて、こゝに忘れおきしその穿きものは正しく向をかへて揃へて直されたり。見るよりふと予を待ちつゝあるかの感起りぬ。

急しく呼びぬ。されど低聲にて、

「高津さん、高津さん。」

「はい。」

といふ聲耳許に聞え、ばつとさす燭の影に紅なる色こそ見えたれ。しと／＼とある緋縮緬の長襦袢のみ引絡へる、胸高に扱帯をわがねて、ゆるやかに結びさげ、燭をかゝげたる、白く清げなる腕あらはに、■をもれたる膚の色雪を欺くに、燃立つばかりなる紅の照り添ひて、■嬬に立つたる姿、けやけくあざやかなる美しきものゝふるまひに面をうたれ、予はものもいひあへず目をニりて立ちぬ。

紅なる立姿は、片袖をかざして予に其面を背けつゝ、透し見るや、頭をば少しく傾けて、身動もせざりしが、予が呆れ顔可笑しかりけむ、堪へ兼ねたる笑ひ聲、ふつとばかり吹き出すより早く、落すやうに燭を置きて、身を返し奥の方に走り入りしは、うつくしき外國人なり。あとに續きて足早に入りぬ。椅子にかけたるミリヤアドは見るよりまた微笑みぬ。

高津は背後より背を叩けり。

「お手柔かなしかへしで、まあ新さんも結構でございました。お驚きなすつたでせう。」
「何うも、實に。」 とばかりなりき。

高津は頻りに打笑みつゝ、

「何うして新さんを驚かすまでにや、大抵な騒ぎではありません。もう／＼一日が／＼りの御趣向で、やう／＼出来あがつたんでございますわ。待つてゝも急に、見えなさらぬものだから、薄着であなた、先生がお困りだらうぢやございませんか。寒いんですもの。ふる／＼震へて在らつしやるのよ。あら、串戯ぢやありません、ほんとうに、貴下風邪をひきますよ。」

ミリヤアドは肩をすばめて、何とかしけむくづをれし、頤をば襦袢の襟に埋めて居たり。背より軽く羽織らせたる、高津の手を密とおさへて、ミリヤアドは顔をあげぬ。

「まあ待つて下さい、」

予が方に打向ひ、すゞしき目に涙をうかべて、

「上杉さん、貴下も母様がありません。」

と沈みたる聲にこそ、さはまたわれを泣かするや。さしうつむきてうなづきぬ。

かくいひ出しては、ミリヤアドが、其母のことを語りつぎて、予を泣かしむるが常なりき。

母はわが國の婦人なりし由。父なる人ゆゑありて其故郷に歸る時、ともなはむといひしかど、大和の地棄て難くて辭みしかば、さりと強ひかねて、女兒のみ引放ち、洋を渡りて米國に歸りしはミリヤアド三歳の年のことなりとぞ。

父ち年と老しいてみまかりたれば、たよりにきみなし兒この、たらちねの懐なつかしとて、一人ひとりのみまたわが國くにに渡わたりしかど、二十はたとせ歳せあまりは二ふた昔むかし、其人そのひとの行ゆく方へ知しれず。恵めぐみもし、欺あざむかれもし、つかひもなくして、大方おほかたの財ざい産さんははた失うしなへる、日ひごとごと毎と心こころ細ほそくなりゆくに、彌い増ましに戀こひしく慕したはしき母ははにはめぐり逢あはずといふ。おなじ線くりごと言ことも血ちを吐はく思おもひ、いつもほとゝぎすの初はつ音ねとこそ聞きけ、予よは其その時ときも涙なみだぐみぬ。

袖の雨

予が涙ぐみたるを見て、ミリヤアドの、あれよといひたる、身の動きに椅子は摺れてぞ音せし、風もなく朧夜の静なり。

「否、ね、御覽なさい、美しいでせう、きれいだこと。」と緋の長橋袷の袖を引き、襟のあたりを撫でゝも見せ、

「御覽なさい、きれいでせう。」

また少し椅子をば寄せぬ。

高津は背より、

「おや、あかん坊のやうですこと、うつくしいきものを見せてすかすぢやありませんか。新さん、をかしいね。」

「何、綺麗だよ、ミリヤアド、そりや、高津さんの衣ですか、よく似合ふんだもの。」

「いゝえ、高津さん、澤山衣持つて居ました、みんな、私のために、あの

とやゝ激して言ひいづ。予は驚きて高津を見たり。女は慌しく遮りて、

「あら、そんなことをいふもんぢやありません。新さん、うそですよ。」

「いゝえ、ほんとう。みんな私に貸して、もう何にも持つて居ない。可哀相に抽斗はからツぽになりました。」

と寂しく笑ひぬ。

「だつて、其代り私にや母様があるから可いぢやございませんか、ねえ、新さん。」

予は答ふる處を知らず。

「ミリヤアドはお可哀相に、便のない方ですもの。些少はお力になつてあげる人がありさうなものだのに、見ツともない、みんな（なざれの歌）ばかりで、餘計な世話までしたがるんですもの。誰がそんなものに世話をして貰ひますもんかね。」

おなじ國の宣教師なんざ頼もしくもない、わざと困らせて、仕様がなくなつた時分に、何うにかしようとするんださうで、もう此節ぢや寄りつかず、大方此方から泣込むのを待構へて居るのでせう。數會へもあれツきり入らつしやらず、學校は學校でまた何ですツさ、随分つらうございますツて、私や毎朝學校へ入らつしやるのを送るたびに、後姿を見ちや、あゝ觀物になりにおいでなさると、いつも然う思ひますわ。おうつくしいし、お若いので、何處にかねえ、新さん、先生の様子がありません。まるでなぶりものにするんだもの。私や口惜しくツてならないけれど、いま彼處をお留めなすつちや、他に収入の道はなし、それこそまた、（なざれの歌）や宣教師に嫌味なこともおきゝなさらなくツちやなりません。それも何だし、（なざれ）だつて、意地になつて、新さん、あなたの學資までお手つだひをしないやうになつたぢやありませんか。皆なそれです。まだまあ名義だけでも先生で在らつしやるのが可いと、私も存じますから、時々もう我慢が出来ないとおつしやるのを、無理に勧めちや出してやりませう。ほんとに涙が出るんです。

家へお歸りなすつたつて、それこそ私が届かないから、慰めてあげることも出来ません。始終くよ／＼して在らつしやる、まあ、御覽なさい、今日はあなたをだますんだつて、朝から元氣よくお騒ぎなすつて、こんなゝりをなすつてからに、何うも、震へて在らつしやるんです。それでも、何なにか氣晴になつたでせう。これが新さん、精々なお樂なの、はかないねえ。」

といひかけて、ミリヤアドの背後に立ちつゝ、肩に衣服を被せかけながら、あらためて語を繼ぎ、
「ねえ、ミリヤアドさん、私のことなんざ、何うでも可うござんす。そんなことをおつしやらないで、おもしろいお話でもなさいますしな。」

「否、濟みません。皆なくしました、何うしたら可いでせう。心配するけれども仕方がない。高津さんは國から歸れといひます。けれども、私が可哀相だつて歸らないで居てくれます。家で大變怒りました、もう構はないツていつて寄越しまして、而して二人とも婦人です、高津さん、私、二人とも婦人です。」

と両手に胸を搔抱き、

「母様には逢はれませんが。もうなくなりましたか。もしも知れませんが、これは記念です。母様が着て居ました。」
とつつむきさま、袂を取りて引きのばして、つく／＼見たる襦袢の袖に、はら／＼と落涙せり。

母上

高津は其背を搔擦りぬ。やゝありて思ひかへせしさまに、あはれなる顔をばあげき。

「上杉さん、貴下の母様もこんなきもの着て居たでせう、然うでせう。」

ミリヤアドのわけもなきことをいふ、高津とわれ顔を見合せぬ。
母上の紅き手がらかけたる髪結ひて、欄干に倚りたまひしを、目にきざみたるものゝ、嘗て予に語りしことあり。さる時や、兒なる予が今の年よりも一ツ二ツうらわかくて、かゝるものも着たまひしなるべし。なつかしき紅の色なるかなと、くもりたる目におぼるげながら、霞なかの色ぞとばかり、ミリヤアドの姿瞻りぬ。

「ね、然うでせう、矢張着て居たでせう。」

とうら問ふまゝ、或は違ふまじと思ひて頷きぬ。いかなりけむ、予は茶博多の帯のみに残れど、紅き手がらかけたまひしことありと人のいへば。

予が頷くをみて、ミリヤアドもまた打ちうなづき、

「上杉さん、私、母様の着物を着ました。母様、ね。而してあなた、母様がおありでない。こゝに母様が居ます。もう泣かないでも可い、私も母様がありません、私が母様です、母様がありますからミリヤアドも泣きますまい。あなた、ミリヤアドになつて、私が母様になつて、あなたが上杉さんで、私が其母様で、而して遊びませう。今晚は四月一日、あなたは今朝私をだましました。こんな母様、あなたは厭でせう、けれども、だまされるが可い、うそならば構ひません。」

母ぞといふより、血の色其頬にのぼり、目の中さえ／＼しう、眉動きて、肩を震はし、つと立ちて、椅子をはなれ、引寄せて、予が手を取りたり。

高津は莞爾と笑ひながら予がつむりを撫でぬ。

「大きな坊やが泣蟲だねえ、どれおめざを持つて来てあげませう。」とまた打笑ひて勢よく室を出でたり。　　ミリヤアドは太く激せる状にて、つく／＼と予が顔を見まもりぬ。

「ミリヤアド。」

と叫びつゝ、ミリヤアドは、あはれなる其兒の額に接吻せり。つめたき髪は予が頬にふれて、あたゝかく柔かなる其白き胸は、躍りたる予が動俵をおさへぬ。

跽音したれば身を分てり。

高津は菓子皿を据ゑ持て来り、卓子の上に置いて、いざとて勧めしが、手のふるへたれば取らで差置きぬ。

「めしあがれな、をかしの坊やだこと。ほゝゝゝ、」

ともてなし顔に、一ツ取りてさしよする、拳ばかりの大きさなる、名は知らねど辭みも得で、手に取りて口をつけたるに、意外なる舌觸を、わが唾かわきつ、とのみ怪しきまで、いま一齒ぞかけたる。

「おや！」と思はず叫びぬ。

「好い氣味！」と、ミリヤアド手を拍きて笑ふ。

「それ御覽なさい、やう／＼敵を取つてあげた、ミリヤアドさん、可うございましたねえ。」

「あゝ。」といふ面はれやかなり。

「そりやもう私といふ、助太刀がついて居るんですもの。新さん、綿の餡といふものは新發明ですが、いかゞなものでございますね。何うでございました。折角、ミリヤアドさんと二人で拵へてあげたの、大抵な御馳走ぢやありませんよ、澤山おあがんなさいまし、まだ、いくらでもございます、何うです、もう一ツ、たつた一ツめしあがれな、いゝえ、餘所ではなし、御遠慮には及びませんよ、おぼゝ。」

と獨悦に入る。

「御馳走様、もう澤山。」

「いゝえ、それがあなた、さうおつしやるのが餘計な御遠慮と申すものでございます。何の書生さんが菓子をばくつくのは當前でございますわ。さあ、めしあがれ、よう、おあがりなさいましな、おゝ、嬉しい。」

「馬鹿だねえ。」

「まあ、人が折角志をお勧め申すものを、そんな御挨拶つちやあるもんぢやございません。お氣には入りますまいけれど、何うぞ召食つて下さいましな。」

とわざとらしく揉手をしながら、高津の嵩にかゝりたる、予の困じたる、二人の状をば、つく／＼と見たる、ミリヤアドの晴々しきさまに引かへて、然も憂はしげに、聲も沈み、

「もう堪忍、澤山です、可哀相。」

といひかけて、くはせものゝ葉子の一個を手に取りて、ものをもいはで視めしが、ふるふ手さきの瘦せたるを、予が肩にかけてうつむき見つゝ、

「坊や、眞個にこればつかり、さうでない御馳走をしたくつても、今日は出来ません。私貧乏、母様、意地氣がない、堪忍して、上杉さん。」

と悄れたる目の中に露を宿し、思入りたる状なりしが、何とかしけむ、空を仰ぎ、美しき眉根の顰むと見えつ。苦と叫び、胸をおさへて、よろ／＼と倒れかゝる、長椅子に足を投げつゝ、腰を掀りて身を絞り、片手を卓子につきて掌を口にあてし、はんげちの裏透す、血汐の紅、眞白き指を洩れて見ゆるに、婀呀とばかり縋り寄る、高津も顔の色をかへたり。唯一度のそれながら、多量の咯血に弱り果てゝ、綿の如くなりたる身體を、搔抱くやうにする、予も夢心地に手を添へて、助けて臥床に入らしめたる、素人の二人が手して、水よ薬よといふ容體かは。

高津はといきして咳く如く、

「咳はなさるし、顔の色はお悪いし、こんなことでもなければ可いと思つて居たに、」と聲をうるます心細さ。

「何處、醫者を、醫者は、」といふのみ。

「いゝえ、あなたが行らつしやつても一寸は分りません。近うござんすから一走行つて参りませう、お頼み申します。」と早や帶占を引占むる。

「それでも夜分だから。」
「構ひますもんですか、其上かういふ時は、男の方が力になります。病人も何んなにか、あなたを便にして居ませう。洋燈をあかるくしてあげて下さい。つい一走り、可うござんすか、新さん頼みました。」
「といひずてに、忽ち門の戸に跽音聞ゆる、四角あたり犬の聲、うらかなしげに吸え出だして、表、裏町、坂の下、一齊にうなりかはす、山の手の大路夜更けたり。」

【六之卷・完】